

S F (ストリートファニチャー) の現況調査と開発研究

豊田修身・坂下仁志
企画・デザイン部

Investigation and development of Street-Furniture

Osami TOYODA・Hitoshi SAKASHITA
Planning & Design Division

要旨

地域の素材や歴史遺産といった有形無形の資源を生かしたS F(ストリートファニチャー)や建物で、「街作り」「街路作り」を進め、魅力的な景観を創り出しているところが増えてきた。しかし、一方で「迷走する公共デザイン」とテレビで取り上げられたように、テーマパークで見かけるマスコットの的なものが抜け出したような電話ボックス、「蛙」や「鬼」といった地域興しのキャラクターをあしらった橋や公衆トイレが出現するなど、景観デザインに対する誤解が先行しているところが多いのも事実である。本研究は、欧米に比べて無秩序とも言える都市空間の景観デザインをいかにして改善していくかという大きな課題に対して、まず、S Fという道具レベルの要素を正確に把握することからスタートした。身近な事例として大分市、竹田市の街を自らの足で調査し、それぞれのS Fを主観評価法に基づいて評価を行い、今後のS F開発やS F設置のガイドラインと成り得る資料を作成した。

1. はじめに

S Fとは、Street Furniture (ストリートファニチャー)の略である。直訳すれば、街路の家具となり、公園や街路の公共空間に設けられるベンチ、灰皿、屑籠、車止め、案内板、彫刻、モニュメント等の道具全体を指す。

私たちは、これまで自分の生活スタイルに合った家具を室内に配して生活を快適にしたいと思い、そのデザイン、つまり、インテリアデザインに関心をはらってきた。そして、その欲求が段々満たされるようになって、ようやく、屋外(街路)でも生活に必要な道具(家具)を適切に配置して快適な屋外空間を形作りたいと考えるようになってきた。(Fig.1)

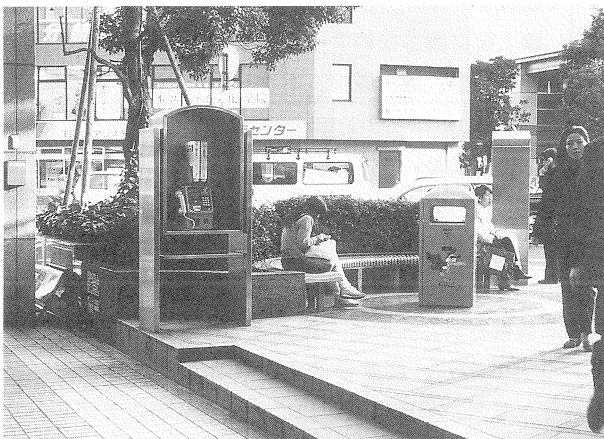


Fig.1 必要なS Fが配置されたポケットパーク

ところで、ストリートファニチャーが外来語として定着しつつあるのは、屋外の家具という概念が日本人にはなく、そのまま用いた方が誤解がないという選択だったと思われる。少々長いので、S Fと略している。略すと科学推理小説のS Fと間違われそうで、わかりにくいですが、少しずつ生活に定着していること、また、室内においても屋外においても道具を家具的に大切に扱おうという気持ちの含まれた「ストリートファニチャー」という言葉の概念は、デザインを進めていく上での一つの視点を与えてくれているので、本研究でもS Fとして記述していくことにした。

2. 研究内容

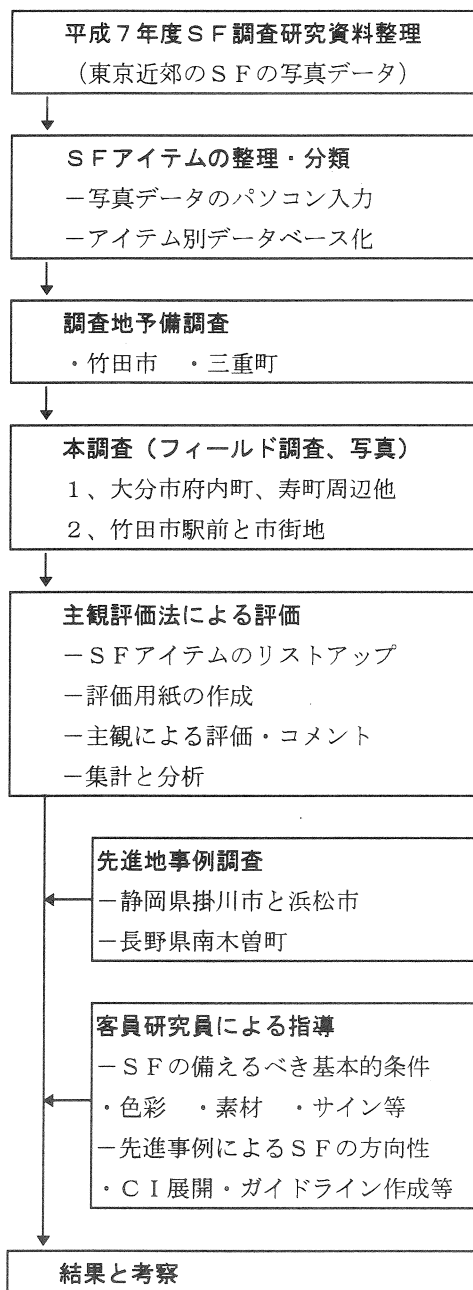
2.1 研究フローチャート

本研究は、公共空間の現場調査を行って、「S F」「設置環境」「人」の関係を客観的に整理する中で、問題を抽出し、解析してデザイン資料として役立つモノとすることを目的にスタートさせた。研究の全体計画としては、S F設置の際のガイドラインの作成や地域産材を活用したS Fの開発提案及びCGによる景観への適合シミュレーション等も考えているが、今年度はS Fのおかれている現況について調査する事に重点をおき、Table 1のような流れで研究を進めた。

予備研究の部分は、平成7年度に行ったS F調査で撮影した写真資料(スライドフィルム、約1000枚)の

中からピックアップしたものをパソコンにデータとして取り込んで整理分類し、誰もが必要な時に出力して活用出来るようなデータベース化を図った。

Table-1 SF研究の流れ図



2.2 SFアイテムの整理、分類

アイテムを細かく分けていくと数え切れない程多様なSFだが、その機能を正確に把握するために大きく分類して、その目的や用途を整理していくことにした。ストリートファニチャー自体が概念的なくくりで、機能や用途の異なるモノたちの集合体であるから、明快な分類がしにくい。今後の研究が進めやすく、かつ、提案が一般の人達にもわかりやすいように、Table-2のような

オリジナルな分類を試みた。一般的に考えられているSFを、機能のウエイトがどちらに置かれているかで、「ハードウェア的ツール」と「ソフトウェア的ツール」に分けた。そして、主に視覚等によって情報を伝達するものを「コミュニケーションツール」とし、その3分類に含まれず、周辺で機能を果たすものを「周辺ツール」とした。

Table-2 SF分類表

分類 1	<ハードウェア的ツール> ●ベースファニチャー <街路の基本機能を満たす道具類> -ベンチ、灰皿、屑籠、バス停、電話ボックス等 ●照明(ライティングシステム) <夜の街路を安全で快適に演出する機器類> -街路灯、フットライト、ライトアップ等
	<ソフトウェア的ツール> ●アメニティツール <老若男女が快適に過ごせる空間作りの道具類> -モニュメント、彫刻、噴水、公園遊具等 ●舗道と樹木 <石畳の遊歩道や心をなごませる街路樹等> -木レンガ、マンホール、プランター、街路樹等
分類 3	<コミュニケーションツール> ●サイン <地名や解説、案内等の情報の伝達ツール> -記名サイン、誘導サイン、案内サイン等 ●広告 <企業等が存在や活動をPRする広告物> -商店看板、イベント広告用の幟等 ●標識 <交通を安全円滑にするための情報伝達ツール> -交通標識、道路ミラー、信号機等
	分類 4 <周辺ツール> ●上記に属さないツールや空間、建物、外観等 -壁、塀、橋、煙突、ポケットパーク、駅舎等

2.3 現況調査

このように多様なSFを調査するには、まず、地域を絞り込む必要があり、調査対象としてリストアップした竹田市と三重町を予備調査した。三重町は、近年、道路網が整備され、大野郡の拠点として急速な発展を遂げている。しかし、調査の対象となるようなSFは少なかった。まだ、行政にも町民にも公共空間のデザイン等に対する意識の芽生えが感じられなかった。現段階では、三重町より竹田市の方が適当と考え、現代的な券

雰囲気づくりを目指す大分市と伝統的な雰囲気を残す竹田市の2ヶ所に絞った。

竹田市の調査地として選んだ竹田駅前の市街地は稲葉川と小高い丘に囲まれた約700m×500m程のスペースである。歩いて行こうと思えばどこへでも行ける位の空間であった。調査の結果、駅舎から商店看板までの多様なSFを25点、ピックアップして、「主観評価法による調査用紙」(Table-3)をそれぞれ作成して、当部の4名のデザインスタッフが各々の主観に基づいて記入した。大分市も同様に25点をピックアップし、合計50点について評価した。

Table-3 「主観評価法による調査用紙」

■件名		コード番号								
場所		分類								
写真貼付スペース			備考 (調査対象) (物件) (作者) (素材) (照明方法) (周辺条件)							
■評価										
	物理的特性			イジ特性			機能特性		景観特性	
	素 材	形 態	表 現	素 材	形 態	表 現	情 報 性	使 用 性	調 和 性	配 置 性
利用者適性										
環境適性										
地域適性										
小計										
計										総合計

	非常に	やや	どちらでもない	やや	非常に	
楽しい						さびしい
あたたかい						つめたい
あらい						こまかい
やわらかい						かたい
強い						弱い

■コメント (自由に記入)

3. 考 察

評価は順位を競うものでなく、個々のSFが利用者や

環境や地域と適正な関係を作り出しているか、また、SFとして求められる様々な特性を備え、それが十分に表現されているか等を検証するために行った。各データについては省略するが、結果を集約すると以下のようなことがわかった。

①総合評価の高いものは、SFそのもののデザイン以上に、周囲の環境に溶け込み、全体としての雰囲気が優れている。それらは、街づくりのコンセプトと基本の部分で合致している。

②素材感の生きたものは評価が高い。特に天然素材をうまく使ったものは好感が持たれている。逆に擬木、擬竹といったような天然素材に似せた使い方は最低の評価となっている。

③メンテナンスの心配があるものは美的に感じられない。水辺空間等は特にその傾向があるが、利用者は現在のSFを見ながら、将来の姿も想像しているものである。また、安全安心への配慮も同様で、デザインに生かされているものは評価が高い。

④個々の家や地域住民が景観に配慮しているものは、評価が高い。お金がかかっているかどうかではなく、デザインに暖かみがあるかどうかである。景観に対して持つべき意識の基本はこの辺にありそうだ。

⑤SFそのもので見ると、中央の大手の企業が作ったようなものは、洗練されたデザインであっても風景に馴染まず、地域の素材や技術で作ったものは、稚拙なデザインや奇をてらったものが目に付く。これからのSFデザインを地域で考えていく上での大きな課題であろう。

⑥製品個々の評価からは見えてこないが、SF全体としてのデザインコンセプトがなく、ちぐはぐで場当たりのデザインであることは誰も否めないであろう。SF同士に違和感があって、雰囲気を壊しているようなところさえある。

4. 終わりに

SFの評価を進めながら感じたことだが、デザインの良し悪しは、そのSFが「景観に溶け込み、街の一部になり得ているかどうか」で決まる。そして、最終的な評価は、外からの評価でなく、地域にすむ人が気に入っているかどうかで下される。

今年度の研究では、SFの整理分類、データベース化を進めながらSF評価の試みを行って、SF研究の基礎ができた。次年度は、これをベースに、調査対象を広げ、そこで生活する人たちの声も聴きながら、地域にすむ人たちが関心を持つようなSF設置のデザインガイドラインを作成したい。